

〈書 評〉

Henry E. Allison

Kant's Conception of Freedom: A Developmental and Critical Analysis
(Cambridge University Press, 2020)

城戸 淳

1937年生まれだから、もうカントの寿命をこえて活躍しているアリソンの新しい著作『カントの自由の思想——発展的・批判的分析』は、あわせて550頁をこえる大著である。同じ「自由」という主題について、すでにアリソンは1990年に *Kant's Theory of Freedom* (Cambridge University Press, 1990) を上梓している(この著作については、邦訳『カントの自由論』(城戸淳訳、法政大学出版社、2017年)があり、本誌第20号の書評にもとりあげられた)。以下では便宜上、この1990年の書を「旧著」と呼び、2020年の「新著」と区別したい。

序文によれば、この新著は旧著を改訂するという計画が拡大して、新たな構想による一書として成ったものである(p. ix) (p. の数字は新著の頁数を表わす)。新たな構想の眼目は、副題にある「発展的」(あるいは発展史的)分析である。発展史への関心は、著者の超越論的演繹論の研究書 *Kant's Transcendental Deduction: An Analytical-Historical Commentary* (Oxford University Press, 2015) にも覗かれた。それと比べても、この新著の発展史は規模が並ではない。初期の『天界の一般自然誌と理論』から晩年の『道徳の形而上学』にいたるまで、自由という論題にかかわる著作や講義録・遺稿について論じつくしており、アリソンの多方面にわたるカント研究の成果を見渡すものになっている。ただし、旧著とおなじく、「外的自由」にかかわる政治哲学や法哲学の話題は省かれている。

発展史といえ、もちろん旧著でも『純粹理性批判』から『基礎づけ』、『実践理性批判』へと時系列にそって論じられていたし、先立つ1770年代との異同も検討され、その後の1790年代への展開も追跡が試みられていた。新著で大きく拡張したのは、前批判期の検討である。分量としては、じつに本文のほぼ半分にあたる233頁が、前批判期(1770年代のいわゆる「沈黙の十年間」をふくむ)にあらわれた自由の諸考察を検討することに費やされている。新著の後半は批判期の自由論の展開にあてられるが、旧著の設計と異なるのは、『判断力批判』における自然から自由への移行について一章をさいて検討している点であろう。

旧著とかさなる批判期の自由論についても、新著ではより詳しく論じられる箇所がおおい。読んでいて印象的なのは、しばしばカントの文章をたっぷり長めに引用して、その読み方や解釈の可能性を検討しているところである。カントの自由論の諸論点の理論的整合性を突き詰めるといよりは、カント自身に存分に語らせて、その真意を汲みとるという態度に近いように感じられる。じっさい、書名(正題)からしても、旧著が Theory と掲げて、おもに批判期の自由の理論を検討したのに対して、新著ではそれが緩やかに Conception に置き換わり、カントが自由ということはどう考えたか、その考え方がどう発展したかを叙述するものになっている。

以下では各章の概要について、アリソンがとりあげる論材を列挙しつつ、紙幅の許すかぎり論点に言及するというかたちで、手短に紹介する。

第1章「1750年代のカントの諸論考と、自由意志の問題の位置」では、『天界の一般自然誌と理論』(1755)、『形而上学的認識の第一原理の新解明』(1755)、『オブティミズム試論』(1759)(および遺稿群)について論じられる。アリソンによれば、1750年代のカントは、ニュートン力学に基づく科学的世界像をいだし、自由についても両立論的に考えていた。とりわけ『新解明』においてカントは、ライプニッツ＝ヴォルフ式の「決定根拠律」に基づく知性的自発性の自由[・]に与して、クルージュス式の主意主義的な均衡無差別の自由[・]を批判する(pp. 20 ff.)。ライプニッツ学派の知性主義の両立論と、クルージュスの主意主義の非両立論という対立は、アリソン式のカントの自由論の発展史を導く基本的な構図になる。

第2章「1760年代前半のカントの理論哲学と、自由の考え方への繋がり」では、当時のカントの形而上学のほうに焦点をあわせて、『自然神学と道徳の原則の判明性』(1764)、『負量の概念の哲学への導入』(1763)、『神の存在の唯一可能な証明根拠』(1763)、そして『ヘルダー形而上学』(1762-64)について論じられる。カントは総じて1750年代の両立論を維持し、たとえば『負量』においても心のなかの動機の実在的対立を自然主義的にえがく。しかし他方、カントは心身問題について物理的影響説をとるから、心身間の実在的相互作用を認めることになるが、これによって自発的な内的強制(自己支配)を外からの因果的強制と調停するという新たな課題が現われる。これが予定調和的な両立論からの離脱の萌芽になる(pp. xii, 81 f.)。

第3章「1760年代前半のカントの道徳哲学」は、形而上学から道徳理論へと話題をうつして、『判明性』、『1765-66年冬学期講義計画公告』(1765)、『ヘルダー実践哲学』(1762-64)、『美と崇高の感情にかんする考察』(1764)をあつかう。『判明性』のカントは、道徳の根幹をなすのは定言的な「責務」の概念であると訴えつつ、ハチソンの道徳感情論に傾倒して、責務の目的としての善は「感情」によって感じられるとする。しかし、責務と感情という両極をつなぐことは、まだ「道徳法則への尊敬の感情」を発見していない当時のカントにはできないことだった(pp. 85-97)。カントの努力は「人間にふさわしい、自然主義的・人間学的に基礎づけられた道徳性」(p. 124)をえがくことだが、その試みは途上にとどまったのである。

第4章「カントのルソーとの対話、『視霊者の夢』」は、ルソーの『不平等起源論』や『エミール』などの自由論を検討しつつ、『美と崇高』のための「覚え書き」や『視霊者の夢』(1766)に刻まれたルソーの痕跡を跡づける。ルソーによれば、自由の感覚は意識的に判断・選択する行為者の概念から切り離しえない(pp. 142 f.)。さらに真の自由は、自己の心情に命令し、自己の支配者であるという美德に存する(p. 146)。「覚え書き」のカントはこのルソーの思想を受け継ぐが、アリソンによれば、このような自己意識的な自制としての自由の概念によって、カントは初期の自然主義的な自由論を脱却する方向へ歩み出した(p. 154)。

第5章「「大いなる光」から「沈黙の十年間」へ——1769~1780年の自由の諸構想」では、『感性界と叡知界の形式と原理』(1770)、そして70年代の『形而上学遺稿』、さらに『L1形而上学』『コリンズ道徳哲学』にそって、批判期の「超越論的な意味での自由の……概念」(p. 233)へと向かうカントのさまざまな努力に光が当てられる。アリソンは沈黙の十年間の思考の可能性を、ひとつひとつ引用しながら確かめる。とりだされる論点はじつに多彩であるが、ひとつの重要な着想は、理性の叡知的自由が感性界の因果性に介入することを説明するために、理性は「感性の別の流れ」に承認を与え、感性的な因果の「充足性を補完する」と捉えることである(pp. 210 f.)。これはアリソンのいう「取り込みテーゼ(incorporation thesis)」へも繋がる論点である。

第6章『『純粹理性批判』におけるカントの自由論』では、超越論的弁証論における第三アンチノミーの論証と、その解決のための「超越論的自由」について、またそれと規準章の「実践的自由論」との異同について論じられる。アリソンの解釈は、『批判』における自由論の一貫性を尊重するものであって、その骨子は、シェーネッカーなどの新しい研究を考慮しつつ、大筋では旧著の第I部を踏襲している。許された紙幅も尽きてきたので、以下でもこのように、旧著と重なるところは駆け足で済ませたい。

第7章『『純粹理性批判』から『基礎づけ』へ』は、『シュルツ著書評』(1783)、『ムロンゴヴィウス形而上学』(1782–83)という途上の段階をはさんで、『道徳形而上学の基礎づけ』(1785)をあつかう。『基礎づけ』についてアリソンは、旧著について、さらに *Kant's Groundwork for the Metaphysics of Morals: A Commentary* (Oxford University Press, 2011)において詳細に検討済みである。新著でのアリソンの判定は以前と同じく、『基礎づけ』は相互性テーゼによって「自律」の概念を導入するという大刷新をはかったものの、つまるところ「循環」から抜け出せずに、純粹理性に実践力(純粋な道徳的関心)を与えることに失敗した、というものである。

第8章『『実践理性批判』における理性の事実と自由』では、『基礎づけ』における定言命法の演繹の失敗を承けて、そこから「大転回」した『第二批判』(1788)における自由の演繹が検討される。『第二批判』のカントは、道徳法則の規範性の意識としての「理性の事実」を起点にして、そこから自由の実践的実在性を演繹するという方向をとる。このような解釈の大枠は旧著の最終章をふまえたものだが、新著では新たに大幅に拡充して論じられている。

第9章『『判断力批判』と、自然から自由への移行』は、新著に加えられた野心的な一章であり、アリソンはこの移行にカント哲学のひとつの頂点を見とどけようと試みているように思われる。自然と自由とは先立つ2つの『批判』では截然と分けられたが、しかし『第三批判』(1790)によれば、そのあいだにひろがる「裂け目」に架橋せねばならない。というのも、自然のなかで道徳的意志の目的を実現することが可能であるべきだからであって、その可能性は反省的判断力によって自然の合目的性として判定される。アリソンは、「文化」と「文明」の歴史哲学や、美への関心の社会的起源にも目を配りつつ、自然美を判定する美感的判断力によっていかにして移行が可能になるか、その答えの再構成を試みる。

第10章「自由をめぐるカントの最後の思想」は、1790年代の自由論をあつかう。前半は、『道徳の形而上学』(1798)における「意志(Wille)」と「選択意志(Willkür)」との区別をふまえて、カントの自由論では自由に悪を選ぶことができないというラインホルトとシジウィクの異論に応答する。立法的な意志の下に立ちつつも自由に背きうるものとして選択意志を導入するねらいは、「[ライプニッツ派の] 回転焼肉機の自由と[クルージュスの] 無差別の自由とのあいだの論理空間を見つけて守ること」(p. 464)にあるという整理は、『新解明』以来の発展史を見通しうる眺望を与えてくれる。後半は『たんなる理性の限界内の宗教』(1793)における「根源悪」をあつかう。悪における「非社会的社交性」の要因をより重視するなどの違いはあるが、アリソンの解釈はおよそ旧著を踏襲するものである。アリソンにとって根源悪論は、「心根(Gesinnung)」を根源的に選択し獲得する叡知的な行ないへと迫るものであり、おそらくそこにカントの自由論のもっとも深い場所が認められる。

最後にひとこと加えるなら、アリソンの新著を読みとおすことで実感されるのは、自由をめぐ

るカントの息の長い思索は、形而上学と道徳という2つの絡みあう関心から成る、ということである。前者の理論哲学的な関心はおよそ『新解明』から『純粹理性批判』へ、後者の倫理的な関心は『判明性』から『基礎づけ』へと跡づけられるだろう。批判期のたとえば『実践理性批判』や『判断力批判』の自由論は、このように前批判期からつづく2つの哲学的系譜を統合するものである。カント哲学のもつ素朴だが本質的な力は、このように形而上学と道徳とをひとつの構図のなかで語り、そこに理性の統一を実現してみせることにあるだろう。アリソンのえがく発展史は、カントがその哲学的生涯のほとんどすべてをかけて、そのような統一の実現に努力していたことを教えてくれる。